

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) No353
(新著の紹介)

専門書を読まなくなった大学生と授業づくりの挑戦 吉田文先生（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<https://smizok.com/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。
*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。

※公益財団法人電通育英会の研究委託を受けて行われています。

※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

(ご紹介)



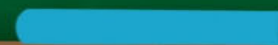
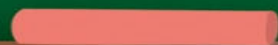
吉田 文

よしだ あや

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。
博士（教育学） 専門は教育社会学
日本高等教育学会 会長、日本学術会議会員

共編著『専門書を読む：教員と学生でつくる10講座』（ミネルヴァ書房、2025）、単著「グローバル人材の育成をめぐる奇妙な関係」『グローバル化と日本』東信堂、2024）、単著「学びに魅了される一放送大学における学び」『＜学ぶ学生＞の実像』（勁草書房、2024）など



No29

#1 日本の大学における

教養教育・一般教育の歴史

—吉田文先生(早稲田大学教授)にインタビュー—

これからの日本では、教養教育が大学、高大接続ゾーンで見直されていく。そのために知っておくべき知識！



No29

#2 海外・日本における

教養教育の近年の動向

—吉田文先生(早稲田大学教授)にインタビュー—

教養教育は必要ないのか？
それとも新しい時代に向けた
何か有用性があるのか？





吉田文・濱中淳子・渡邊浩一（編）（2025）. 専門書を読む —教員と学生でつくる10講座 ミネルヴァ書房

序論 大学生と学術専門書

第1部 古典に挑む（『イリアス』を読もう—講義形式の授業での試み；デューイ『民主主義と教育』上巻を読んだ—哲学書から現代の教育を考える、他）

第2部 理論を＝む（法学部新生と『なぜ歴史を学ぶのか』を読む—読解力向上の目標設定；『独裁者のためのハンドブック』『多数決を疑う』をゼミで読んでみた—質の高いディスカッションを目指して、他）

第3部 社会に臨む（対話を通して思考の解像度を上げる—『はじめて学ぶ生命倫理』のグループ講読；『女性の生きづらさとジェンダー』を読み、対話する—埋もれた声に気付くための方法、他）

それではご覧ください

吉田・濱中・渡邊編（2025）『専門書を
読む』 ミネルヴァ書房を読む

吉田 文

（早稲田大学教育・総合科学学術院）

アウトライン

1. 企画の意図
2. 本書の新規性
3. 10人の取り組みと多様な書籍
4. 章ではなく講座
5. 学生は変わるか⇒変わる！
6. 教員としての反省⇒次につなげるために
7. ブックガイド・鼎談・あとがきにかえて

1. 企画の意図

- “学生、本、読まないね”…人社系の教員の文句
- 多くの学生にとって、専門書は自ら手にとるものではない…現代の学生文化
- 学生を本を読むことに誘導しない、大学や教員の問題…FD！

では、

- 授業で、**書籍（専門書）**を読んだら学生は読むようになるか？
- そもそも、授業で、書籍の**読み方**を教えることができるか？
（書き方（アカデミック・ライティング）の授業は普及したが…読み方は？）
- 自分の授業を実験の場として、記録をつけよう！

2. 本書の新規性

- 専門書を通じた教員の働きかけに対して、学生がどのように変化するか、それに対して教員は次に何をするかという、相互作用の記録
- **FD論として書く**

<ルール>

- 原則、担当授業、1セメスター継続
- 専門書：学術書、古典、新書など多様（除：学術論文）
- 実験であることの学生への周知と了解：授業開始時 or 授業終了後
- 録音・録画はしない

3. 10人の取り組み・多様な書籍

- 専門分野：哲学、西洋古典学、歴史学、経済学、政治学、国際関係論、心理学、科学技術社会論、教育社会学
- 書籍：『イリアス』、『民主主義と教育』、『批判理論入門』、『人口論』、『なぜ歴史を学ぶのか』、『独裁者のためのハンドブック』、『多数決を疑う』、『「働くこと」を思考する』、『ソロモン 消費者行動論』、『はじめて学生命倫理』、『女性の生きづらさとジェンダー』、『ルポ 教育困難校』、『「つながり格差」が学位力格差を生む』

4. 章ではなく講座

- 書籍のタイプによって、3部にまとめた：「第Ⅰ部 古典に挑む」（3講座）「第Ⅱ部 理論を掴む」（4講座）、「第Ⅲ部 社会に臨む」（3講座）
- しかし、本書は通読には適さない書籍、故に章ではなく**講座**。

＊ 関心のある講座をゆっくり読み進めながら、何が学生を変えるか、教員は何に共感するかを、ご自身の取り組みに照らして、参考にしていきたい。

5. 学生は変わるか⇒変わる！

一例として…ジョン・デューイ『民主主義と教育』（上）、吉田の3年ゼミ、8名（記録をとったこと、書籍にすることは事後承諾）

<はじめに>

- 書籍：学生の選択・決定（デューイの名前を聞いたことがある、毎回2章を読む
- 吉田の勧め：マネージャー（授業をリードする役割）を2名、レジュメの作成。デューイの書いていることを、身近な例に引き付け、論点を考えてくる。

<第1回、第2回>後悔の弁

- “こんな難しい本だとは思わなかった…”、“何回読んでもわからない…”、“2章読むのは大変…”

＜第2回の終了時＞画期的な提案

- “デューイが生きていた時代のアメリカってどんな状況だったんだろう？”（初版は1916年、“手分けして調べてみよう”
- 第3回で発表：19世紀後半の新教育運動の時代、“学校が民主主義の要だったんだ”、“国家が画一的な教育拡大することへの反発？”

＜第5回＞第8章「教育の目的」が1つの転換

- 教育のaim、ends、result、endを読み解く議論が白熱し、図式化するに至った。当初のaimが予定されたendsに至らず、予想しなかったendやresultで終わってしまうことがあるというデューイの議論に引き付けて、現代の教育批判に盛り上がる。

＜第8回＞ コロナ感染者の増加でZoom

- マネージャーはいつもより準備してきた。
 - ブレークアウトルームを利用すると議論は盛り上がる。
-

＜第10回＞ 最終章は対面で

- 私が何も言わなくても議論する。
- “われわれの生きる時代はデューイとは異なる。もっと自由な選択、自己成長という点から、将来の仕事を考えることができるのではないか。そうした時、現代ではどのような教区が大事なのか”、
- “誰によってもよい教育などないと思う。マジョリティに合わせるのか、マイノリティを考慮するのか、そこを考えないといけない”

6. 教員としての反省 ⇒次につなげるために

- ひとまず、上巻を読み通した。
- 学生は、苦勞しつつも読めるようになる。
- 学生は、書籍からのヒントを得て、楽しそうに議論することもできるようになる。
- 次へつなげることができなかった。
“下巻はもうよい…”、その後、書籍を読んでいる様子は見られない。
- 読書は、勉強の一部で終わらせないためには、どうしたらよいか。

7. ブックガイド・鼎談・あとがきにかえて

学生と読書を考えたい人に

- ブックガイド：古今東西いろいろある

執筆者の本音が見える

- 鼎談：大学教育の更なる再考が必要
- あとがきにかえて：執筆者の反省と成果